

使徒言行録 22 章 6 節～11 節 「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけた方の声は聞きませんでした。『主よ、どうしたらよいのでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました。

パウロは殺意に燃えるユダヤ人たちに対し、階段の上に立って弁明を始めた。自分はユダヤ教の律法に忠実に生き、それ故、キリスト教徒たちを捕らえ、連行し、殺害もした。エルサレム神殿当局から迫害の許可状を貰い、ダマスコに向かっていた。

ところが、旅を続け、ダマスコに近づいた真昼ごろ、突然、天から強い光がパウロの周りを照らし、地に倒れた。すると、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と言う声がした。「主よ、あなたはどなたです」と問うと、主は「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである」と答えられた。一緒にいた人々に光は見えたと、話しかけた方の声は聞こえなかった。パウロが、「主よ、どうしたらよいのでしょうか」と問うと、主は、「立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる」と言われた。パウロは、光の輝きのために目が見えなくなってしまったので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入った。復活した主イエスと出会い、目が見えなくなったドラマチックな回心をした出来事を語っている。

目が見えない、見えるということについて、考えさせられる。パウロは将来を囑望されたファリサイ派の学徒で、律法に対する熱心さは誰にも引けを取らなかった。その熱心さがキリスト教徒たちを殺害する迫害へと押し出していたのである。ユダヤ人が、最も大切にしているモーセの十戒の第六戒は「殺してならない」である。十戒に従うならば、殺すことはしないはずである。ところが、パウロは殺害の息を弾ませていた。律法を遵守する熱心が、モーセの十戒を見えなくしたのである。矛盾している。人は教えられた小さな真理を絶対的なものと思込む時、自分自身と周りが見えなくなる。この矛盾からの脱却が回心の内実である。それは、迫害する者をも赦し、包み込む「愛」の発見であった。

主イエスは生まれつきの盲人の目を開く神の業を示された。盲人にファリサイ派の人々は様々な圧力をかけ、主イエスの業を打ち消そうとするが、彼は敢然と主イエスを預言者と告白する。主イエスは、彼と出会い、「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」と告げる。また、ファリサイ派の人々の「我々も見えないということか」という問いに、「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」と答えている。「目が見えない」とは分かっていると豪語することであり、「見える」とは神に愛されている自分と隣人を見出すことではないか。